

裏面に
「自主の旗」
創刊号を
掲載しました。



日教組和歌山 再建して26年

「自主の旗」1000号を記念して

教職員の声を大事にする組合をめざして！

組合員のみなさまへ、毎回自主の旗を読んでいたいただきありがとうございます。日教組和歌山が結成されてから、もう26年になります。もう四半世紀がたちました。この「自主の旗」という機関誌を発行してから、もう1000号を迎えます。



第1000号
2016. 2.16
編集部発行
Tel 436-6820

WTU
書記長 南方栄三

1000号
記念特集号



あんしん むすぶ
教職員共済

川島 栄 初代委員長

Q① 1990年当時、労働界の大きな変化に伴い当時の和教組から分かれて、日教組に再加盟したのはどうしてでしょうか。

A 当時は、和歌山の教職員組合は一つで、日教組に加盟してました。全国の労働界の再編の動きによって、和教組は組織として日教組から脱退することになった。私たちの仲間は、日教組の活動方針でやってきたこともあり、この和歌山の地から日教組の旗を降ろすことができない、旗を守りたいという思いで、和教組から脱退し新しい組合を作り日教組に再加盟をしました。

Q② 新組合について、再建時の苦勞を聞かせてください。

A 実は再建には苦勞しました。日教組の旗を守るという思いで、和歌山市を中心に約350人から400人だったか、多くの仲間を声をかけて集まってくれた。しかし、再建してすぐにつぶれるようでは困るので、教育会館「事務所」を日教組本部から資金を借りて作りました。法人の登記も難しかったが私がやりました。

他の労働組合や近プロの教組などの協力を得ました。多くの人たちのお世話になったことで再建できたと思っています。感謝しています。

Q③ 組合というものをどのように考えていますか。

A 教職員組合は、職場での人間関係をつなぐもの。子どもたちのことや自分たち教職員の悩みなどを共有できるもの。職場の弱い立場の人を守るためのもの。教育委員会や管理職に云うべきことはしっかりと云うという組織です。また、役員として

どうあるべきかを考えたとき、それは、やっぱりみんなのためになる姿勢を見せることが大事です。労働条件など職場環境を良くするために熱意を持つこと。教員としての教育実践をしっかりやること。こんな人が組合活動をやってきたと思います。

辻本義輝 二代目委員長



Q① 「自主の旗」1000号、どんな感想をおもちですか？

A すこいですね。元々「体裁がよく立派だけど時々しか出ない機関紙」より、「安直で少々雑だけど、発行頻度の高い機関紙に」という考え方でした。もちろん中身も、身近でわかりやすく、「そうだ、その通りだ」と読者の気持ちに響くものであることを大事にしました。もちろん必要な情報を迅速に提供するという基本に立っていますが。

Q② それは組合運営の基本と関係がありますか？

A そうですね。それまでの組合運動のあり方に対する疑問や不満がありました。

一つは、「特定の政党に100%依拠する運動のあり方」です。私たちはよく「自分の言葉で語ろう」と呼びかけました。二つは「官僚的な体質」ですね。幹部がエラそうで組合員を数としてしか見ないような組合にはしたくないと思いました。僕自身いわゆる「組合臭さ」が嫌だったんですね。

Q③ 結成時の苦勞はいっぱいあったでしょうが、とくにどんなことが・・・？

A 昔の苦勞話などは、聞いても面白くないと思うのでパスしますが、新設の小規模校のようなものなので、とにかく忙しかったです。逆に、現場の組合員さんに会うとよく「何にも手伝えなくごめんなさい」と言ってくださり、「いえいえ、組合員でいてくれるからいろいろなことができる・・・」と答えました。とても嬉しかったです。

Q④ 結成時組合員さんだった人も多くが退職しました。これから組合が発展するための力は何でしょう。

A 私は退職後7年以上小規模な民間企業で働いていますが、いくら労働法規があっても、労働組合がないと働く者としての権利はおろか、自尊心まで奪われかねないという現実を見てきました。また、そうした職場では「周りの仲間に対する関心が薄く、助け合う風土がない」という傾向があります。

まず組合員さんが「組合員であること」に誇りを持ってほしいですね。組合は、自分のためだけでなく、助け合い組織としてみんなのためにもなるし、近い将来職業人になるであろう子どもたちのためでもあるのです。そのことを、入っていない人にも理解してもらおうと頑張っています。

お二人の先生、インタビューにご協力いただきありがとうございます。これからも、日教組和歌山は、成長を続けていきます。今後とも子どもたちのために、組合員さんのためにご協力をよろしくお願ひします。